

平成 13 年度

北嶺中学校入試問題

国 語

(注意)

- 1 問題用紙が配られても、「はじめ」の合図があるまでは、中を開かないでください。
- 2 答えはすべて解答用紙の指定された解答らんを書いてください。
- 3 字数が指定されている場合には、特に指示のないかぎり句読点も数えてください。
- 4 解答中質問があったり、用事ができた場合には、だまって手をあげて監督の先生につたえてください。
- 5 「おわり」の合図で鉛筆をおき、監督の先生が解答用紙をあつめおわるまで、静かに待ってください。

□ 次 の 文 章 を 読 ん で 、 あ と の 問 い に 答 え な さ い 。

大倉先生の授業がはじまって間もない日のことであつた。私は今年こそ納屋なやに入れられぬように勉強しようと決心していたけれども、もちろん、学校から帰ると晩までは小さい妹を背負い、時には大きい妹の手までひいて子守をしなければならぬし、夜は夜で薄暗いカンテラの明りで紙袋貼りなどしなければならぬので、家でアヨシユウフクシユウなどすることはできなかつた。教室で精一杯に緊張きんちやうするよりほかなかつたのである。私は何より横見をしてはならぬと自ら戒いましめて、一生懸命に前を向いていることにした。

ある日、それは筆筒も鉛筆も机の上に出していなかつたからたぶん修身しゅうしんの時間であつたらう。私は先生の話をきいていると、窓の外の桜の花がひらひらと風に吹かれて本の上に落ちて来た。てのひらでそつとはらいのけても、桜の花びらは又ひらひらと机の上に舞い落ちて来た。私はこれは勉強の邪魔じゃまになる、と思つた。一年生と二年生の時に①「そういうしつけをされていたのである。教室のいちばん南側にいた私は、立ち上つてガラス窓をがらりと閉めてしまった。すると大倉先生はしゃべつていた話をやめて、

「おい、おい、開けといても、かまやせんじやないか。花見をしいしい勉強するのも面白えじやないか」と、私の方を見い見い笑つた。私は耳の根まで真赤になつて、閉めた窓を開け直した。あれは、②「今思い出しても昨日のことのように頬ほがほてる。」

これより、たぶん一週間か十日か後のことであつた。読方で私達は、「私の家」という課を習っている時、先生は次のような質問をした。

「みんな、自分のことを自分で言う言葉にはどんなのがあるか、知つとるだけ考えて見い」
生徒は首を左右に振つたり、うつ向いたりして、考えると、(A)湧わきかえるように手を挙げた。

「先生!」「先生!」「先生!」
次々に指名が行われた。

「はい、じぶんと言います」

「はい、わたしと言います」

「はい、わたくしと言います」

「はい、わがはいと言います」

「はい、われと言います」

「はい、ぼくと言います」

先生はそれらを一つ一つ白墨で大きく黒板に板書した。私も手を挙げていたのであるが、一度も指名にあずからず、内心くやしくてならなかった。教室はもとの静けさに帰って、もう誰の手も挙がらなかった。

「もうほかにないかな」

大倉先生はあらためて教室をぐるりと見まわした。私はそのとたん、いきなり右手を高くさし挙げた。

「あります。先生！」 ③ 心臓がとんとと波打った。五十人の級友の瞳がいつせいに私の上に注がれた。先生は静かに、

「須藤市太！」と、私を指名した。私は息をはずませて立上った。

「はい、おらとも言います」

大きく、はつきりと答えて着席すると、級友たちの爆笑が教室中に渦を巻いた。私はその嘲笑に似た渦巻の中で、始めて自分のへまを感じた。が、一度口から出た言葉は取返す術もない。私は又赤くなってうつ向いていると、その時いきなり立ち上って抗議を申し込んだ生徒がある。

「先生、おらと言うのは下品な言葉です。そんな言葉を使っちゃいけん」と、串本先生が言われました」

見ると、それは山本医院の二番息子の山本春美であつた。山本医院は村一番の分限者で、春美は二年生の時までは級長をしていたが、三年生になつてからは副級長にもしてもらえず、平の生徒になつていた。多分大倉先生がひいきをしなかつたためであつたろう。少なくとも私たち生徒仲間ではそういう風評であつた。級長の職権をかさにきて生徒の並び方が悪いと言つて編上靴で（春美は学校中でただ一人靴をはいていた）私たちの素足を蹴つて歩かないだけでも、皆がどんなに嬉しかったか知れない。

ところで、大倉先生は春美の抗議には何の返事も与えず、素知らぬ顔で黒板の続きにひときわ大きくおらと書きそえた。すると、春美はもう一度立つて青い顔のうすい唇を前に突き出して言った。

「先生！ おらと言つてはいけんのじゃないのですか」

その語調は、自分の意見を大倉先生にまで強いようとするかのように聞えた。先生はしばらく黙つたまま、じつと春美の顔を見すえていたが、

「使っちゃよいか悪いか、そんなことを今しらべとるのじゃない」

小さくはあるが底力のある声で答えて、分厚な唇をぎゅつとひきしめた。教室がしんと静まってせき一つ出なかった。たわいのないもので、全く人間という奴はたわいのないもので、さっきまで私を嘲笑していた五十人の級友は、ことごとく私の「イミカタ」になったかのごとく思われた。その豹変（ひょうへん）ぶりに私はかえって（B）をさえ感じた。（木山捷平『尋三の春』）

※「修身」……旧制の小学校の教科の一つ、現在の道徳にあたる。

「読方」……旧制の小学校の教科、国語の一つ。

「分限者」……金持ち。

問一、——ア・イのカタカナを漢字に直しなさい。

問二、——①「そういうしつけ」とあるが、これはどのような内容のしつけですか。わかりやすく答えなさい。

問三、——②「今思い出しても昨日のことのように頬がほてる」とあるが、それはなぜですか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、子供らしさのない、いい子ぶった行動がはずかしかったから。

イ、授業に集中するために一生懸命に考えたことを笑われたから。

ウ、先生のためを思ってしまったことがわかってもらえず、悲しかったから。

エ、みんなのためにしたのに笑われて、くやしかったから。

問四、（ ）Aにあてはまる語句として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、おそろおそろ　イ、三々五々　ウ、整然と　エ、われさきに

問五、——③「心臓がとんとんと波打った」とあるが、このときの主人公の気持ちとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、一生懸命に手を挙げているのに指名してくれないことから生じる怒り。

イ、成績のよくない自分がみんなに注目されていることから生じる緊張感。

ウ、誰も答えられないことを自分だけが答えられることから生じる喜び。

エ、みんなが知らないことを自分だけが知っていることから生じるほこらしさ。

問六、() Bにあてはまる語句として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、いさぎよさ

イ、かわいらしさ

ウ、にくらしさ

エ、ふしぎさ

問七、主人公にとって「大倉先生」はどのような先生だと思われますか。わかりやすく答えなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

九州、大阪、東京と一週間あまりの旅をしました。今回も疲れしました。ずっと年のせいだと思っていました。途中、そうではないと気づきました。どこにいても同じ風物に囲まれ、^①旅が旅になっていないのだと気づいたのです。

数年前までは乗り物を乗り換える度に人々の交わす会話に、少し違った言葉が登場し、^aそれもしばらくすると聞き慣れた言葉となりました。それと共に変化したと思った風景がいつの間にか、見たことのあるような景色の形をして旅が続きました。旅は非日常の空間だと言いますが、その連続が疲れをいやしてくれていたようです。

ところが、ここ数年の旅はどんどん変わっています。会う人、見る人、みんな寡黙^{かもく}です。そのくせひとりしゃべりをやっています。ケータイと呼ばれる機械に向かい、しゃべり続けています。当方が少し休みたいと目をつぶっても、しゃべり続けています。電車内でも放送で「客の迷惑となるからケータイは使いな」とがなり立っています。時々この方がメイワクだと感じたりします。今回の旅ではiモードとかいう機種を見つめ、シコシコとやっている人が周りにいっぱいいて落ち着きません。

誰かが「カプセル社会」と言いましたが、本当でした。みんな自分だけのカプセルの中で旅を続けていました。どこかの国の首相の言うIT^アカクメイとやらの、行きつく先の社会の中での旅は疲れます。

九州でメジロの群をみました。小さな声で鳴いていました。食堂の店先のつばきの木々の間です。急に少年時代の鎮守^{ちんじゅ}の森を思い出していました。

ゆっくり聞きたいと耳をそばだてたら、耳は傍^{かたわら}らで^②ケータイで話す人の声の支配下になっていました。少しでもつばきの木に近づこうと席を立つたら、また別な人にケータイの呼び出し音です。^bそれは山奥の寺の階段で腰を下ろしたときにも、小さな渡船で波の音を楽しむ間にも聞こえる音です。いずれも見えない他者と会話する自分だけのカプセル人でした。

私にとっては旅がむつかしくなりました。

一週間ぶりの我が家の庭に立つとケータイに支配された音の世界が一変し、饒舌^{じょうぜつ}な自然の会話がとび込んできました。

コガラとシジュウカラが給餌台で争っていました。入院中のアカゲラのドラミングに応えて前の林でタンタンと枯れ木をたたく恋人づらのやつがいます。ヒヨドリの声、キタキツネの声、合間に北風が枝々をゆすり、オーケストラに参加を強制しています。

急に去年の冬の一日を思い出しています。夜半まで冬には珍しく雨が降り、前線通過の直後にやってきた強い寒波のために、我が町にあるすべての木々は枝に氷の玉をつけたのです。

朝はその氷の玉が朝日に映え、何十年に一度かの、全町天然のイルミネーションで飾る風景をつくりあげました。人々はカメラを片手に大撮影会をやりました。

昼過ぎ少し風が出て今度は全町天然のオーケストラによる大音楽祭となりました。枝についた氷の玉が風にゆれ、お互いが触れあい、たたきあい実にはばらしい音楽祭を開いたのです。チリチリ、チリチリ、ヒリヒリ、ヒリヒリと、風の吹く度に林が身をふるわせ、エンソウをしました。

私は終日、③自然がつくりだした芸術の中に身を置くぐらいに大喜びをしていました。

カプセル人種にぜひ一度聞かせたいなあ、今思っています。

(竹田津実『野生からの伝言』)

※「寡黙」……ことば数が少ないこと。

「饒舌」……くち数の多いさま、おしゃべりなこと。

問一、——ア・イのカタカナを漢字に直しなさい。

問二、——a・bの指示語の指し示す内容を答えなさい。

問三、——①「旅が旅になっていない」とあるが、それはなぜだと筆者は考えていますか。説明しなさい。

問四、——②「ケータイで話す人の声の支配下になっていました」とあるが、これはどういうことですか。答えなさい。

問五、——③「自然がつくりだした芸術」とあるが、これは何ですか。本文中から二つ、十字前後の語句を抜き出して答え

なさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

きみたちは四年制大学を卒業すると、その学部によって、工学士とか経済学士とか、薬学士とか法学士とかいう称号しょうごうをあたえられる。(a) イギリスやアメリカでは、大学には文学士と理学士としかない。工学部も経済学部もあるが、あたえられる称号は理学士か文学士である。(b) 大学というところは、かならずしも経済とか工学というような専門の学問だけをすると、と考えられておらず、むしろ広く教養としての学問を身につけるところ、と理解されてきたからである。

イギリスの大学をみても、長い間、十九世紀の末にいたるまで、ギリシャ・ラテンの古典や、^①数学が重要視された。古典はもちろん紳士しんしとしての教養のためであり、数学を勉強するというのも、論理的な考え方を訓練するためで、数学者になるためではなかった。大学は社会のリーダーを養成する機関であったから、エリートにふさわしい教養を身につける、ということに、中心がおかれていたわけである。したがってまた、工学とか農学とかいうような技術的学問は、大学で研究し教授するにはふさわしくないもの、大学以外の専門学校でとりあげるべき学問である、という考えは、長い間ヨーロッパでは支配的であった。技術的学科は大学に入らなからず、というわけである。私が勉強した経済学も、富とか『かね』とかに関する^②臭い学問くさいがくもんとみなされ、イギリスでも十九世紀の後半までは、大学の中で独立した地位を認められなかった。経済学はアダム・スミス以来、イギリスを中心に発達したことは、きみたちも知っているだろう。ところが意外なことに、十九世紀の後半まで有名なイギリスの経済学者は、ほとんど大学の先生ではなかった。そればかりでない。蒸気機関車を発明したワットにしても、ファラデーの法則などを発見したファラデーにしても、進化論のダーウィンにしても、みな大学の先生ではなかった。イギリスの大学は「A」を中心に展開されてきた。

これにたいして、学問の重要性を強調したのは、十九世紀のドイツの大学である。ドイツはイギリスにくらべて後進国であったから、ドイツを近代的な国家として建設していくために、大学は第一に学問研究の中心にならなければならない、と考えたのである。もつともこの場合、学問とは真理の探究をめざす科学や哲学ていがくのことであって、技術の研究はドイツでも大学にはふさわしくない、とみなされた。第二に、大学はそこで研究された成果を学生に教育する場であり、学生もこの真理の探究に参加するものと考えられた。(c) 第三に、この真理をめぐる研究と教育とによって、大学は人間形成に大きな役割を演じるものであった。この人間形成ということは、いいかえれば教養であり、教養を身につけることである。(d) ドイツの大学の場合にも、教養は重要な問題であり、この教養と学問との統一が目標となつたのである。

(e) 真理というようなことは、きみたちにはあまりなじみがないであろう。事実、つかみどころがない。きみた

ちも知つてゐるであろう上田敏の訳詩

山のあなたのそらとおく

さいわい住むと人のいう

ああわれ人と求めゆきて

なみださしぐみ帰りきぬ

山のあなたのそらとおく

さいわい住むと人のいう

の中の「B」を真理と読みかえてみると、その雰囲気がわかるのではなからうか。真理は手のとどかないところに咲いている花である。私たちはなんとかそれを手に入れたいと願ひ、努力をするが、それは「③」の「花」である。あるいはニュートンがいったように、私たちが手に入れた科学の法則は、浜辺の砂の数粒にしかすぎないのではないか。

ところが二十世紀に入つて、学問の性質は急速に変わつてきた。科学が操作可能な知識となり、技術と直接に結びつくようになる、それは急速に発達し、原子の世界から宇宙の成立にいたるまで、科学的に明らかになつていった。このような科学・技術の発展のうえに、現在の大学は立つてゐる。その科学の成果のすばらしさに圧倒されて、大学の先生たちも、そこで学ぶ学生たちも、真理とはなにか、などといまさら問ふことをやめてしまった。したがつて、「真理の探究」も④大学の倉庫の中か博物館にしまひこまれてしまつた。

大学の中で「真理」は棚上げされたが、教養は生き残つた。ところで、ドイツの大学が考えたように、真理の追究を基盤とした人間形成という形での教養がくずれたとき、教養とは何であろうか。教養は専門と対比されている。専門課程が狭い科学の分野に学生の活動をかぎつてしまふので、人間としてより広い知識をもつこと、それを教養といつてゐるのではなからうか。しかし、専門以外の知識をもつことが教養だろうか。

ここで私はもう一度、きみたちに真理の追求をというつもりはない。だが、教養とは人間としての自分を形成することだ、という点を思いだしてもらいたいと思う。そのためには、人間とはなにか、人生とはなにか、という問題をはつきりさせな

ればならない。もちろん、そのような大きな問題を教養課程の一年や二年で解くことはできない。しかし、そのことを考える手がかりだけは、ぜひ大学で学んでもらいたいと思う。⑤ それこそが教養の中心問題なのだから。

(隅谷三喜男『大学でなにを学ぶか』)

問一、() a s e にあてはまる語句を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、したがって イ、そして ウ、というのは エ、ところが オ、ところで

問二、—— ①「数学が重要視された」とあるが、それはなぜですか。説明しなさい。

問三、—— ②・③の語句の() にあてはまることばを答えなさい。両方ともひらがな三文字のことばで、②は「なんとなくあやしい」、③は「遠くからながめるだけで、手に入らないもの」ということを表す語句になります。

問四、() A にあてはまる内容として、最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、学問というより高い技術 イ、学問というより高い教養

ウ、教養というより高い技術 エ、教養というより高度な学問

問五、() B にあてはまる語句をその前の詩の中から抜き出して答えなさい。

問六、—— ④「大学の倉庫の中か博物館にしまいこまれてしまった」とあるが、これはどういうことですか。答えなさい。

問七、—— ⑤「それ」とあるが、この指示語の指し示す内容を答えなさい。

問八、筆者は「教養」というものをどのようなものと考えていますか。説明しなさい。